《研究ノート》

「自由主義史観」について

西成田　豊

自由を擁護する私の立場からすれば，「自由主義史観」は「唯物史観」などよりはるかに魅力的なネーミングである．その「自由主義史観」の主張は一時(いつとき)の勢いを喪失した観があるが，遅ればせながら私も，藤岡信勝氏の本『自由主義史観とは何か』を読んだ．読後の感想はふたつある．第一に，歴史研究者の間でしばしば言われているほどこの本はいい加減なものではなく，感情に走らず議論の展開は一見しっかりとしている．第二に，それにもかかわらず，やはりこの本は史実認識や論理展開の面であまりにも欠陥が多い．「自由主義史観とは何か」．藤岡氏はこうのべている．

「それは，自律した個人による自由な活動を可能な限り許容するような社会が結局のところ，より豊かで幸せな社会を実現する道なのであり，実際にも，日本の近現代史は右の路線に近づいた政策によって成功し，そこからはずれた時には失敗したといえるようなコースをたどってきたと見る考え方のことである．」

何とも長い「定義」である．なぜ長いのかと言えば，右の文章は史観の定義ではなく，日本の近現代史についての藤岡氏流の歴史の解釈だからである．それは藤岡氏の言う日本近現代史の「40年期間説」と密接に関連している．藤岡氏は日本近現代史を

①明治維新（1868年）から日露戦争勝利（1905年）までの37年間

②日露戦争勝利から敗戦（1945年）までの40年間

③敗戦から「経済大国」として世界の頂点に立った1985年ごろまでの約40年間

の三期に分け，「近現代日本の120年の歴史は，40年単位で，成功→失敗→成功，というパターンで歩んできた」とのべている．右の「40年期間説」を規定する統

一基準があいまい（①と②は戦争を基準，③は経済成長を基準としている）であることはひとまず措き，そもそも日本の近現代史を，成功→失敗→成功という文脈で40年単位で区切れるのか，という根本的な問題がある．

「第一期」の40年は「成功」とされているが，「自由主義史観」の定義によればそれは，「自律した個人による自由な活動を可能な限り許容するような社会が，結局のところ，より豊かで幸せな社会を実現する道」が実現したということであろう．しかしこれは，「司馬史観」が説く「明治時代の明るさ」に引きづられた感情移入のこもった，おそろしく非歴史的な解釈である．「自律した個人による自由な活動を可能な限り」束縛する治安警察法が1900（明治33）年に成立していること，この一点を考慮しただけでも，その非歴史性は明らかである．

「第二期」の40年は「失敗」とされているが，1931年の「満州事変」以降はそのように言えても，それ以前（正確には1925年以前）は大正デモクラシーとか，アメリカ人の日本史研究者アンドルー・ゴードンによってインペリアル・デモクラシーと表現されたような，「自律した個人による自由な活動（が）可能な限り」発揮された時代であった．その意味で1931年以前のこの時期こそ，日本近代史でもっとも「明るい」時代であった．

藤岡氏は，「自由主義史観」と「大東亜戦争肯定史観」を決定的に別つのは，前者が後者とは異なり，「大東亜戦争」を侵略戦争だと認識している点にあるとのべている．「第二期」の40年を「失敗」と規定している藤岡氏の根拠はこの点にある．しかし藤岡氏は，吉田裕氏がその著書『天皇の軍隊と南京事件』のなかで1937年11月，武器を捨てて小舟や筏（いかだ）で南京からの脱出をはかる中国兵を日本海軍の第十一艦隊が撃滅した事実を批判的にコメントしたのに対し，「吉田のコメントは，戦争についての無知をもとにした，まるでマト外れなもの」と論難し，田中正明氏の次のような文章を勝ち誇ったように引用している．

「『戦闘の要訣は敵を殲滅するにある』．敗走する敵を一人残らず殲滅することは，古今東西，名将の名将たるゆえんであり，正当な戦闘行為である．」

「大東亜戦争」は侵略戦争であると主張しておきながら，被侵略国の敗残兵を侵略国の軍隊が撃滅することは軍事的論理からすれば当然であるとし，いつしかこの戦争が侵略戦争であるという自説を忘れているのである．「自由主義史観」が「大東亜戦争肯定史観」と異なることは，藤岡氏の本を読むかぎり言葉のうえではよく

分かるが，藤岡氏の精神の内奥に「大東亜戦争肯定史観」の方に親近感をおぼえる深層心理が隠されているように私には思われる．

「第三期」の40年は，藤岡氏の言うとおり「成功」だったと言えるであろう．しかし，この40年は藤岡氏が批判してやまない「一国平和主義」の成長過程であり，藤岡氏が第三期を「成功」と言うのは自己憧憬であるという誇(そし)りはまぬがれないであろう．そればかりではない．「社会主義体制の崩壊によってマルクス主義の評価に最終的な結着がついた今，自由主義の時代が日本歴史上初めて『到来』しつつある」（傍点引用者）と藤岡氏がのべるとき，敗戦以降，「自由主義の時代」が「到来」するまでの45年間は，一体「成功」だったのか「失敗」だったのか，あらためて反問したいと思う．

「自由主義史観」の基礎には，「近現代史の授業改革において何が一体最も重要な問題なのか」という藤岡氏のつよい問題関心がある．「明治の初めから日本は一路大陸侵略に乗り出し，近隣諸国を踏みあらした末に，戦争で国民は悲惨な目にあったとして日本国家を悪逆無道に描き出す『自虐史観』」，「歴史教科書の近現代史についての記述は，否定的な評価に満ち満ちている」，「明治以後の日本の歴史は『富国強兵と侵略』の歴史だった」――以上のようなことを書いてある教科書と，それにもとづく授業を根本的に改革しなければならないというのが，藤岡氏の主張である．

私はこれまで版元の異なる高校の日本史教科書を何冊も読んできたが，藤岡氏が指摘しているような，「明治の初めから日本は一路大陸侵略に乗り出した」（傍点引用者）とするトーンの記述や，「否定的な評価に満ち満ちている」近現代史についての教科書や，また「富国強兵と侵略」で書き貫かれている教科書などはまったくお目にかかったことがない．日本近現代史の各時代について政治，経済，文化が過不足なく書かれているが，政治・経済・文化の相互の関係，三者の構造的総体がよくわからない，暗記中心の記述スタイルになっているというのが，日本史教科書を読んだ私の偽らざる感想である．さらに言えば，私たち歴史研究者の新しい研究成果が教科書のなかに十分取り入れられていないのも，現在の教科書のおおきな問題点である．そうした新しい研究成果が教科書のなかになかなか取り入れられないのは，「いろいろ諸説があるので」とか，「学問的にまだ定着した事実ではないので」といった理由で削除を命ぜられる教科書検定制度があるからである．

「司馬史観」を基礎とする「自由主義史観」の特徴として，藤岡氏は4点指摘しているが，そのうちのひとつとして「官僚主義批判」がある．藤岡氏が教科書検定をパスした教科書を「自虐史観」に満ちていると批判し，「自由主義史観」の特徴のひとつとして「官僚主義批判」をあげるのならば，なぜ教科書検定制度を批判しないのだろうか．藤岡氏の本『自由主義史観とは何か』のどこを読んでも教科書検定制度についてはまったく触れてもいないし，批判もしていない．「自由とは何ぞや」という哲学的議論をここでするつもりはないが，「自由」という言葉のなかには，権力からの自由という意味が含まれていることはまちがいないであろう．

富永健一氏によれば，「イデオロギー」は，「思想のもつ価値評価的な解釈的枠組み」とのことである．この規定からすれば，権力からの自由を説かない「自由主義史観」は，藤岡氏の弁明にもかかわらず，まぎれもなくひとつのイデオロギーであり，「反自由主義史観」と言わねばならない．「自由主義史観」の四つの特徴のひとつとして藤岡氏は，「あらゆるイデオロギー的なるものから自由になろうとすること」をあげているが，それは非常に空しい響をもった言葉である．

「自由主義史観」がイデオロギー史観であることは，藤岡氏の本からも言えることである．「歴史教科書の近現代史についての記述は否定的な評価に満ち満ちている」と，藤岡氏が本気にそう思っているのなら，さきに記した「40年期間説」の三つの時期のうち，「失敗」の第二期を除外して「成功」の第一期と第三期について（一）教科書はどう書いているのか，（二）それがいかに「否定的評価」に満ち満ちているのか，（三）それに対して藤岡氏はいかなる意味において「成功」と考えるのか，以上の三点についてしっかりした議論を展開すべきであった．しかし藤岡氏の本はこれらの諸点について何ひとつ触れることなく，本論288ページ中の94ページ，約三分の一が，「南京事件」の考察にあてられているのである．しかも重要なことは，「大東亜戦争」を侵略戦争と規定し，「第二期」は失敗であったと主張するのであれば，考察・批判の対象は本来「大東亜戦争」の侵略性を否定し，この戦争を擁護する議論に向けられるべきであった．しかし，本文三分の一を割いて，これでもかこれでもかと執拗に追求されたのは，「南京大虐殺30万人説」をほり崩し，日本の侵略性を希釈化することであった．その追求の過程でいつしか「大東亜戦争」＝侵略戦争説が忘れられてしまったことは，先にのべたとおりである．

以上のべたような，藤岡氏の本のアンバランスと考察・批判の対象設定の間違い

は，「大東亜戦争」＝侵略戦争説の上辺（うわべ）の主張と，「東京裁判史観」憎しのあまり逆に「大東亜戦争肯定史観」に親近感を覚える藤岡氏の内面的心理とのギャップにもとづいているように思われる．

さて，藤岡氏が「自由主義史観」を唱えるに至った理由は，湾岸戦争から受けたインパクトであるという（先には「社会主義体制の崩壊によってマルクス主義の評価に結着がついた」ことと主張していたのだが……）．藤岡氏はこうのべている．

「湾岸戦争は私が近現代史教育の改革の必要性を痛感するに至る最初のキッカケを与える出来事であった」，「湾岸戦争は，私の中にあった『一国平和主義』の信仰の枠組を破壊する強烈な体験であった．」

藤岡氏の本を読むかぎり，湾岸戦争，「一国平和主義」が「自由主義史観」の提唱とどう結びつくのかは，ほとんど分からない．それが，かろうじて分かるのはただひとつ，40ページに書かれてある次の文章である．

「明治以降の日本の歴史は『富国強兵と侵略』の歴史であったのではないか．私たちの世代は，それ以降の歴史を知らないのである．／しかし，そのこと自体がまさに戦後，日本人から国家意識を奪い，国家へのほこりをそぎ落す『洗脳』工作がいかに徹底して成功裏におこなわれたかの証左である．」

私なりにまとめてみれば，日本近代史について「富国強兵と侵略」のことばかり教えられてきたので，日本国民は「国家意識」も育たず，国家への誇りももてず，「一国平和主義」のボケに陥り，その結果湾岸戦争にも有効に対処しえなかった，ということである．このように解釈してよいとすれば，藤岡氏の議論には多くの問題点がある．

第一は，既に述べたように「富国強兵と侵略」のことばかり教えるような日本史の教科書はない．良し悪しは別として，そのような教科書は「検定」を通るはずがない．第二に藤岡氏は「第二期」は侵略戦争の時代であり，「失敗」であったと主張しているのであるから，ここで侵略のことばかり教えているというのは「第一期」のことをさすと考えてよいであろう．「第一期」すなわち明治時代にたいする歴史認識のあり方が，1945年以降の日本国民の「国家意識」の有無を規定しているとは到底考えられない．第三に，1945年以降，国家主義意識は国民のなかからたしかに消失したが，新憲法を基礎とする平和国家意識は確実に国民のなかに浸透した．「一国平和主義」という表現は，国際的視点からみた，この平和国家意識で

ある．第四に，平和国家意識としての「一国平和主義」の限界を問題にするのなら，藤岡氏がおそらく考えているような国家主義の強化・育成ではなく，インターナショナリズムを主張すべきである．しかしそれを主張することは，「自由主義史観」の四つの特徴のうちのひとつ「健全なナショナリズム」と抵触することになるであろう．

藤岡氏は，「大東亜戦争肯定史観」が宿命論に陥っているのにたいし，「自由主義史観」は歴史の選択肢を可能性を重視するとしている．この指摘はまことに正しい．とすれば，「一国平和主義」を克服する途も，自衛隊の海外派兵と武力行使を許容するような，「健全なナショナリズム」や国家主義の強化，ただひとつだけではない．国際社会からみてまだまだ遅れているとはいえ，NGO の活動など民間レベルでの国際貢献などたくさんの選択肢があるはずである．

以上，藤岡信勝氏が主唱する「自由主義史観」を批判的に検討してきたが，最後にもう一点だけ付け加えておきたい．

戦後歴史学は，アジア・太平洋戦争について当初は広島・長崎の原爆をイメージして日本人の被害者的側面だけを強調するきらいがあった（これこそがまさに「自虐史観」）が，70 年代以降は日本人によるアジアの民衆にたいする加害者的側面を重視するようになった（「加害者史観」）．「自由主義史観」は，こうした研究史上の流れを把握していないだけでなく，本当は「加害者史観」であるにもかかわらず，これを「自虐史観」と規定するなど，日本語の正しい表現すらもできていないように，私には思われる．

（補論 1） 藤岡氏が主張する「自虐史観」とは，日本近現代史を否定的に描く歴史観は，生徒の日本国家にたいするアイデンティティを失わせ，生徒を「自虐的」な思考に導く歴史観ということであろう．しかし，私の大学での教育体験をのべれば，戦前の否定的な側面を指摘すると，逆に戦前のそうした否定的要素のない現代は良いとする「現状肯定史観」に学生は陥る（現代には現代固有の問題があるのだが）．歴史教育のむつかしさは，まさにこの点にあるといってよい．「否定的な評価に満ち満ちている」近現代史の教科書を使用している初等・中等教育にたずさわる先生は，その結果，生徒は本当に「自虐的」になったのか，具体的な経験を示して「自由主義史観」に反論していただきたい

と思う.

（補論2）　歴史観の性格は，その創造者の思想・理念と，客観的な理論構造によって規定されるのであり，教育を受ける者にどのような感情をもたらすかによって規定されるのではない．これは，歴史を少しでもかじったことがある人であれば，誰しもが認めるところであろう．したがって，藤岡氏の「自虐史観」も，私が比喩的に用いた「加害者史観」も，「現状肯定史観」も，到底「史観」とは言いがたい.

（一橋大学教授）